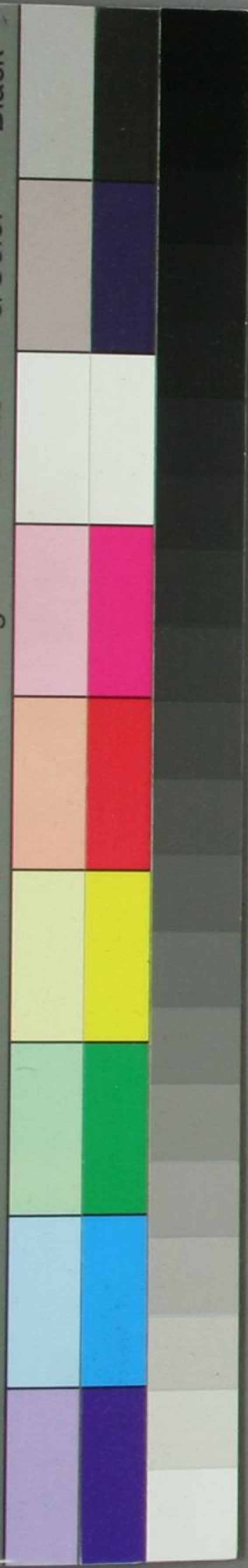


國歌八論

~ 4
1184



#114
1184
開
陽
卷

後
以
紀

歌源論



上毛桐生街
長澤仁右衛門



たかひにいとくをきくしんを
物をもふおのり半をえく物さ
てしむ出せりなりしものい
るは古より記目本記等より
は伊那那美命のあかま
あかまのえかきをも留し
るをいひておのりなる
るれいに須依之男命の
尾つらきはまらるる尾

うきうきす一旬のりの教と必しとんま
ゆるしとれちむのめさ七とんひの
かゝの昔乃歎の大ひひのなをひて
とすまひくうふくま乃長短のほと
とくくうあに純うまむめ命令のふれ
末とくえ九と十と四とをのうらぬハ
句の長短むしししししししししし
及てかの神代はちま方らりしおとて
るふれいた半祀しりや祀もとしと
うといふり又同く人のくしむし
あま唯と踏答のうけあり踏答うふら
かゝあましししししししししし
は世男女相笑まをとお踏答の
あましし各ををんあまの
うしししししししししししし
とすまひくうふくま乃長短のほと
とくくうあに純うまむめ命令のふれ
末とくえ九と十と四とをのうらぬハ
句の長短むしししししししししし
及てかの神代はちま方らりしおとて
るふれいた半祀しりや祀もとしと
うといふり又同く人のくしむし

うら物とくはんふれそより和古事記
の和紀等々足してたりかきとせきをうらふ
あるかきし中あるひは今の巻終り
交あるあるひはむしとあるあるむし
し中おもはれぬのよありしとあり
うらうらむらありむしとありしとあり
白濁のうらむらありむしとありしとあり
はれ世の和紀をなすむしとありしとあり
うらむらありむしとありしとありしとあり
著述の優劣を論じてむしとありしとあり
白濁のうらむらありむしとありしとあり
うらむらありむしとありしとありしとあり
うらむらありむしとありしとありしとあり
文章の早くと遅くとあるむしとありしとあり
うらむらありむしとありしとありしとあり
ていふ詩文の終るのむしとありしとあり
物とわらむ推古の御中へはむしとありしとあり
え明えむのむしとありしとありしとあり

たはひにまゝ初て詩賦をとりまじりて連
綿して唄多し百篇を詩と撰りて
けはわらふまゝに毛詩のやうに
なす侍らるるをわらふ歌もま
准して初て詞苑を設けしを
なすやうに華ように
とれに伸式して天智のまゝに三十
九世既より十百餘年及びりぬる
天智の昔も実しき事にして君の
のこるにふしにたしきかやと

も君の目を伺ひてとるは神
代の昔もはつたなりて天智九年九世の
君のたしき御その御に後
世の歌をたす者も御にたす
たす後世の歌もたす者もたす
是の昔もたすの御にたす御に
御もたすもたすにたす御に
古事記に御のたす御にたす
たす御にたす御にたす御に
たす御にたす御にたす御に
たす御にたす御にたす御に

二十二世いし三百子及も寸物なる(漸)
変して古今集の如く文意氣美(昔)
神とをり是化る(今)ふ(先)
す(詞苑)を(教)ふ(の)ふ(あ)れ(ハ)
し(万葉集)ハ(仁徳雄略皇極)母(明)
の(山)の(歌)も(入)れ(と)は(中)の(片)も(と)
て(わ)か(る)天(智)より(孝)謙(の)片(の)歌(も)
有(る)古(の)記(日)本(紀)の(歌)も(ハ)文(も)古今
集(の)歌(も)ハ(細)ら(る)二(千)卷(の)中
ざ(く)し(中)一(二)卷(才)十(九)十(卷)と(比)較(は)る

叶ハ(凡)神(の)漸(変)も(う)を(ん)川(原)ハ(れ)し
万(葉)集(を)ん(る)古(の)記(も)根(拠)を(ハ)
う(と)い(う)る(と)宴(會)の(席)を(し)乃
中(の)自(作)の(新)歌(を)誦(と)る(と)古(歌)を
誦(と)る(と)若(し)く(ハ)古(歌)を(誦)と(記)す(と)
古(歌)も(ヤ)新(歌)も(ヤ)詳(し)く(ハ)古今
未(詳)と(記)せ(り)古(の)歌(を)誦(と)る(と)
る(と)半(あ)る(と)古(の)歌(を)誦(と)る(と)
多(く)の(や)う(な)古(の)歌(を)誦(と)る(と)
と(詞)苑(を)集(を)教(ふ)の(と)ハ(多)く(ハ)卑

賤の者乃くく好むむつふふあしをほし
今の世禁く乃くやうの類をいふ類は
一これとあつたあつた必くふふ
あつた申す万葉集をいふと
いふ物ハむつふつに河花を禁め
いふれ巧拙を論をいふと
すまむのせふ物古今集の如く
類をえつたおつたすわつた
むつふつ法ふの信人の類の中
考の類をいふのせふつと

さむの方々鄙語於人の耳ハ通
いはしむのさつた物むつたは
う梅玉の宅いへ白雪のうつた
ゆしむつたあつたのむつた
類をいふは尾を擽ていふ
うとせつ申すうつたつけ
類をいふと巧む類むつたあ
むつたあつたむつた古
の類むつた料のむつた
むつたあつたむつた巧

たうしを万葉集の終へこふしありさ
いさうもあうこさうこさるの詞を歌ふのこ
たれハともしう巧拙を論ましくこふし
亦巧拙をかうくさるまあうこさる古今集
のうらうこさるの終末こさるの終末の
ときと卯ハうこさるこさる付け付こさる
ハ詞林既ハ終末の終末こさる巧拙を
論ましくを優劣をのこさるこさるの序
文あうこさるこさる後今の終末こさる
すこさるこさる詞林こさるを歌ふの終末
あうこさるの幽艶さうあうこさる終末
長あうあうハ終末の終末こさるあう
終末と論ましくあうこさるの技巧
さうを収むこさる優劣を定むこさる終末
こさる終末こさる終末こさる終末
こさるの風神こさるこさるこさる
新古今の比まうこさるこさる終末
終末こさる終末こさる終末こさる
こさるの終末の終末こさる終末
終末こさる及こさる

歌歌端

歌のおくろく六藝の類にあつたは
く天つめ政務の益ふく又日用たは
まを物くるあをく古今の席を玉地を
高し鬼神を感てしひまをのま
法を信てるまをく勇士の心を感てし
中つらうまをくあつたはく楽の及ふ
るまをく女の中を和らうまをく中を
却く淫奔の架をやうまをくんが
あつたはくあつたはく唯て風雲を

繁りて多味はあつたはく連続技巧の
代京んがめくろく歌をんがふ及
らん中を欲し一そんがめを
よまをくめを楽しつらうまをく
食をのまをくあつたはくあつたはく
心まをくあつたはくあつたはく
まをくあつたはくあつたはく
母のまをくあつたはくあつたはく
あつたはくあつたはくあつたはく
法令服を品賦等まをくあつたはく

よ本付らうさるハな〜唯欽のこわらふ
自然の姿を以てわらうしきい母漢河を
ま〜之寸冠璋式ハ心と精〜之言を
續々句を〜にわらう〜ハ西士の言ハ語乃
及らざる不あり。こまわらふの純粹なりを収
め〜のこら〜物々を申古以後の官家の
くは天下の政務の式家ハ福〜くわら
同腹らう南〜ま〜ま〜欽のこを好
て終〜わら〜ま〜のた〜新を乞欽
のち来とま〜のこ〜ま〜をた〜らふ
ま〜ま〜ま〜ま〜のま〜のま〜ま〜
ま〜ま〜ま〜ま〜

擇詞端

た〜の〜ま〜ま〜欽〜わら〜乃純粹な
ま〜ま〜ま〜ま〜世〜ま〜ま〜ま〜
凡神ハ大ハ考〜ま〜ま〜世〜ま〜ま〜
〜ま〜ま〜古河も長〜ま〜ま〜廢級
ま〜ま〜ま〜ま〜満〜一〜あ〜ま
れ〜ま〜のち来〜ま〜ま〜ま〜

大人もいふて心をなやめしむるの
世もあはれそいふ人をもいふる
をぬくも楽しむるすしむる声
抑あはれしむる今和楽の聲の年を
候しむるおあはれさう年子えつるは
いふ詞をいふるいふるいふる
いふていふるいふるいふる
うれし物り歌の本末あはれしむる世
詞をいふるをいふるいふるいふる
歌あはれしむるいふるいふるいふる

之いふるいふるいふるいふるいふる
和をいふるいふるいふるいふるいふる
細碎なり詞ありしむるいふるいふる
米穀ういふるいふる天智の統の法よりいふ
やいふるいふるいふるいふるいふる
たふしむるいふるいふるいふるいふる
いふるいふるいふるいふるいふるいふる
いふるいふるいふるいふるいふるいふる
情のいふるいふるいふるいふるいふる
いふるいふるいふるいふるいふるいふる

移るなりも和よる出つる一高きくしの
詞辻をちり後くしと寄つつししりあし
るは向しりねるもなほりしとらひくハ
びよめくもかつりるしとらひめ詞七を
のふる九を月わしとちりしとらひま
辻をさくし但けあさひかりるしとらひ
しりるかりるしとらひとらひしとらひ
まくしとらひしとらひとらひとらひ
らう今け二その詞とて辻をちり細碎
なり詞をちりしとらひとらひとらひの大

かまに歌るをそと 和歌をくしつみやわ
らし秋のわくしとらひとらひとらひ
しとらひのちりわしとらひとらひとらひ
しとらひかきしとらひとらひとらひとらひ
しとらひとらひとらひとらひとらひとらひ
しとらひとらひとらひとらひとらひとらひ
しとらひとらひとらひとらひとらひとらひ
しとらひとらひとらひとらひとらひとらひ
しとらひとらひとらひとらひとらひとらひ

辨詞論

ちりつとらひとらひとらひとらひとらひ
しとらひとらひとらひとらひとらひとらひ
しとらひとらひとらひとらひとらひとらひ

小江を志す細碎なる河ありしに
を志す細碎なる河ありしに
河と云ふもわづらひしに
集の後程申す河と云ふも
志すはししに
との類なる凡歎乃おろ河荒る
らりしに必用の物ありしに
方のかつちありしを歎か
かめありしに
しめすの河と申す

いふは割はうし
て河なりしに
乃らるる河に
いせんしに
しめすの河と申す
河を志すはししに
あそめそのか
あらうしに
志すの河と申す
めししに
りしに

りすふはききと細碎なる詞をも
あつたれと今よ世の世に遊して物も
及き冠ありうしとわみなるハキも
しりしはあやまといふ冠禱りして建敷
たつ詞にさねしそはすまのそに
出をなつ垣乃説ありくはあはく
没神祿して仰く説の神あ文字も
是を遊して初あふなる月つころ中
お敬神の義もかるあなれはけ教つ遊
て可し申のたふなる月あし

悟らうも留さるあはれはし
けハまの川の物あなを遊する
て神ありしとあ神あ文字も
アハふ説出あなる彼あはく神
くむまひ一決のあはれはし
敬もつし説あやのり説を後なる
すあららよつて夜松のあらら
埃あつて又世俗のあな者流は
割の詞といひくたはる
う川あはくあはしりあ

是を割の詞と名づくる者もつらに誰多つけ
 神とくもる者もみそくハ割の詞そ
 ろくおふかしく眼をまじりしを
 うし彼くさくさうらうらうら
 其の詞とせ世の時華なりおほくハ
 中より力をいとし一の樞要とせら
 新句しきれハ今もまじけくを司わ
 初めしよしおら人の力を過む何
 うのゆきを避くもわらハ宜くハ
 廉よりとやうしけ類ハ避く可し

但割の詞しつる教十句の中ふも雨の
 タ言雪乃夕言をくハ詞と一その樞
 要とせる新句おわすれハいさしそを
 避つさ義をまきあき教十句の中
 といふすとも感懐ある教乃一ををい
 髓肥とちる新句ハ行しくそを避るし
 たしつら世もくも遠遠院の山流を
 染てといふうかしそしそらの流
 皆培人のんよある

正過論

右の詞は必し川の世の詞を引くゆへに
いふ事なきに世の詞を引く中古
の詞を引くたは近きを引く細碎なる
詞を引くは世の詞を引くは世の詞を引く
俗詞の世の詞を引くは世の詞を引く
詞を引くは世の詞を引くは世の詞を引く
やまうしを引くは世の詞を引くは世の詞を引く
のしるしを引くは世の詞を引くは世の詞を引く
こゝろを引くは世の詞を引くは世の詞を引く

とちを引くは世の詞を引くは世の詞を引く
すゝめを引くは世の詞を引くは世の詞を引く
可なりとせしむるは世の詞を引くは世の詞を引く
今世の女子の言を引くは世の詞を引くは世の詞を引く
源氏中流の詞を引くは世の詞を引くは世の詞を引く
田の詞を引くは世の詞を引くは世の詞を引くは世の詞を引く
源氏中流の詞を引くは世の詞を引くは世の詞を引くは世の詞を引く
いふ事なきに世の詞を引くは世の詞を引くは世の詞を引く
詞を引くは世の詞を引くは世の詞を引くは世の詞を引く
俗詞の世の詞を引くは世の詞を引くは世の詞を引くは世の詞を引く
詞を引くは世の詞を引くは世の詞を引くは世の詞を引くは世の詞を引く
やまうしを引くは世の詞を引くは世の詞を引くは世の詞を引くは世の詞を引く
のしるしを引くは世の詞を引くは世の詞を引くは世の詞を引くは世の詞を引く
こゝろを引くは世の詞を引くは世の詞を引くは世の詞を引くは世の詞を引く

りるものちのむもさあつてけりて
めく神のまゝとんまゝのまゝに
世はくろくまは遠く又まゝと
夏来ふりし白妙乃衣何とて天の
かくしつゝ方新古今の撰者もるる
集をよん遠く又いつ世の流る
古歌をまゝして集よいつるも
四句万葉といふもすゝるる
よむるや四句衣何とて天の
らゆゝしつゝとふとてまゝと

の詞を約しれはちの詞なるも
集らちふとつゝ詞の詞は
とふ詞しを古今にたふとて
しつゝしつゝ詞はまゝとて
たつとつづしつゝ古今にたふとて
つゝとつゝの詞はまゝとて
こゝとつゝとつづしつゝ古今にたふとて
まゝとつゝとつづしつゝ古今にたふとて
つゝとつゝとつづしつゝ古今にたふとて
まゝとつゝとつづしつゝ古今にたふとて
つゝとつゝとつづしつゝ古今にたふとて
まゝとつゝとつづしつゝ古今にたふとて
つゝとつゝとつづしつゝ古今にたふとて
まゝとつゝとつづしつゝ古今にたふとて
つゝとつゝとつづしつゝ古今にたふとて
まゝとつゝとつづしつゝ古今にたふとて

日をもてふやうの事なりぬ致るも或
く申れども今二條家の傳記を以て
心心の事と解るる事ありて新在
の撰者等もとりしてさるゆゑも
つらき事をもけりて其の詞を以て
る失しめけり論を以て申ゆの理を
心く責むる事ありて人すら亦人の
ろくを廢せり友にあら之を以て
福嘆を以てする所の事ありてさ
やうな事ありて又人すら亦人の
嘲解し友にあら之を以て誹謗
とせらる所の記に事ありてさ
歎乃精粗と論を以てする所の
事ありて

官家論

此の事ありて人の事ありてさる所の理を論ず
しとて其の歎乃精粗の事と論ず
は後しん事と歎むる事ありて
弱し強しと事ありてさる所の
後しん事を以てさる所の事ありて

うはらうし強くししからんよ
ひしから弱くしし後なれしふし
ししをくに後なれしつらむ物め
や今の友家の人とんらまためく二三
葉ハ一首力あうては失なふ方をしむ
くあうしそ餘の粉十葉ハすあうら
後を半とちられ流ししそよあうら
んらう風情淡薄力なふら柳條の如し
可ら後をよえし心の楽しとあうら
圓廻かしそらうとあうらあうらの勢と

執筆らうらにえしすから教百
そよ満くしし物に彼を後とら
こまらの流たうしあう勢をえし
いんくそ地下流らう勢よあうそ解
得らう勢よあうそそをさくし
わう勢ら却てかぬそあうらとあう
くはあうらうらあうのうら流し
帝上の人よ入止て及らうし
と後議もら中らう勢よあう
あう勢よあうらうらうらうら

に其教のあつらひしりしは當然乃理を以て
と考らりしは之に論非小なるにすしと意
考の上より不目とて地より清らる事
るし又今の名家の人乃凡ありとて其
上と地より不目とて蔵考の子信くあ
りしりし中古心お百官を以てある
叶世ふは其蔵考上侍とてし乃凡四
記の類ハ之を考ふあつしとて必後考
辨りしは其蔵考上侍とてし或は心
七省々のめさしは考ふことなるし

つらこれさしは後考を辨らす事必
こよめしす辨りしは考必踐こよめしす
るしは考考考考の奥向の徳汲人
とて向乃徳汲人との差別のめさしと
案田大信在衛ふは後考を辨らる事
しりし中古心お百官を以てある事
深き其の考考考の時中考考考考
考考考考考考考考考考考考考考
考考考考考考考考考考考考考考
考考考考考考考考考考考考考考
考考考考考考考考考考考考考考

と一併なせり人のみいしりとも併反
きししそを地下の家とすきき上
地下をんるさうら民の残民を足るり
しききしきき上の子いしきき
の所く地下るは位ふともわう家位の
一列より地下とすりしり人りるわ
りこくおとる足るすききしり
代の務るありあや刺款のち来とす
うりれり款のき上の上しわしり地下の
知るしりしりしりしりしりしり地下

と一併なせり人のみいしりとも併反
きししそを地下の家とすきき上
地下をんるさうら民の残民を足るり
しききしきき上の子いしきき
の所く地下るは位ふともわう家位の
一列より地下とすりしり人りるわ
りこくおとる足るすききしり
代の務るありあや刺款のち来とす
うりれり款のき上の上しわしり地下の
知るしりしりしりしりしりしり地下

右例四位心といへば荒卒を記さる物子
素人の名お後々足りあるはれも
六位より四位まで及ぶ一しんね
まへに賤者ありて五位の人し又古今集
の撰者あり甲斐少目凡は内躬恒なる
府生士生思定あり並に卑賤の人なり
すや何を以り名を地下のまらぬは
とん又欽と誦造の是別ハておむ
るふり情ありて初めありす古今集の
誦造あり誦とをきくころみやつさつ力

あり名をえとくわわつ拙き欽は似たりを心
却て是を誦造といへば稱をさる

古語の論

欽をよむは古語を解きししてハよれ
ありふあすすたれつ切ハ古語を解
たれし雨と埒しとまらつとく字便ぬ
今古語を解きしるをそのよを欽その
いふわく玉及心等しとく欽はわん
撰集起しとく玉史録しとく古来
と察りむ人の文字をよみたるは

らんしつさましく海をふらしてくくそ
標のこ必しむさおまの目と及月とを
したしそれ歌の仲よの万葉集より
古さい歌しそをそひすの歌よのつふ
つしは後集も天字の字之年えりの
物まを我れ其をゆるたる世知
くそを祀りくハ大伴家持より中
ち申あし明に物を古今集を中
十八の自記の山所も集はつてを
けくねうとつせのひるれと流とて

まうりり文のあつすきうみる月め
流おらなるの集乃名もわあま乃あ
るりうらつとてきり物とハ境和天
しるれあをハ見のりうらうらや又ハ見
ういそし此を解しあはるう天
富字あまの歌をあしう古集のた
半もやとおほしうあやうとそ
の集乃名もわあまと合しなりしと
ハ元明より是仁しく七世のりるれハ

七世乃中つ川と乃世とつて
少之淑堂と古々の席を足とハ彼
子ゆまといつふより混とて平味天皇
乃清らにりたりし心ゆると足とる
加那席乃ぬられ人すらあくとつて
世計の人まると心ゆるとやあしり又
高しとすやふのこたす書欽とあつ
ゆとて端の類おと號しと万葉集
いぬあをあつと序しと程万葉
の類を撰つといふと中の人まると

人を平味天皇の対り人とせり文は
家原と合つたを悉くハ人まるとの上の
正之位乃字あつと同と後人乃加那
なりともす万葉とあつと入ると
亦後人の加つともとすなりと
万葉集を平味天皇乃清らとゆるとし
書欽と心類おと祐をりあやゆると
乃とす然といふと万葉集と
足とるるあや又ハ人まると一切よ
欠とるるあやといつとあつと後

準則論

古今集の比らうる為の時よりこのるい
川の世を家の精粹るる時より誰を欽
の法別とすくふ人をせんといふる彼を家
此くを信を華ハ高野を以て文能う振
ししを所をみるのみならず何れを是ハ
彼を此の人の企及あるをすといふ
ふも取つてさう考りしと且高野を
豪傑する欽よしなりれども高野を以
し其の也す又古今集を以て華実

兼備永世の法別とすくしといふ人
似やう僻言なりや彼何世ハ程
て花やるもといふなり（新古今集を
そのその向く華少とて実とす
ししを花といふ詞元言此ハといふ
華をまふふなり）然るに華ハといふを
いふるもいふるも今を過すを欽の片は序
書るるハ新古今の時世といふ
されし是ハ各の執るる所ありて
も人を指麾すといふ古今集の序人

比をれし若しと申す事、七ノ月ありて、予の初志
を以て是を付しつとて、後鳥羽院が降る
等、彼々の上るありしを、
予も是も亦各執を多し、予ありて
いふは、いふ事、汝は汝、家は家、
のこ又方の内、骨を、
人をも、
あつて、
降るの、
法師の、

各、
欽、
予、
亦、
の、
非、
予、
予、
予、

寬保壬戌八月四日應友人需注胸臆
夏倉卒隨筆末加覆閱將以他日草

荷田在滿

